

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育)

法人名 京都大学

学部・研究科等名 農学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 : I 「教育の実施体制」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 : 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

平成 16 年度～19 年度における取組を引き続き実施するとともに、平成 20 年度から、授業の内容及び方法の改善を図るため、全教員を対象に FD ワークショップを開催した。平成 20 年度は「授業方法」をテーマに参加教員約 144 名、平成 21 年度は「高校・教養教育・専門教育における理科教育」をテーマに参加教員約 121 名と、約半数の教員が参加し、アンケートにおいても、80%を超える教員が「大いに参考になった」、若しくは「参考になった」と回答している。

また、学生の「授業評価アンケート」については、見直しを行い、従来は全科目の 3 分の 1 を抽出して実施していたものを、平成 20 年度後期からは、全科目を対象に実施している。アンケート項目については、授業の内容、進行度、教員の熱意等を、5 段階で評価する方式であり、担当科目、及び全科目の平均点を、教員へフィードバックしている。全科目の平均点は、8 項目中 6 項目が 4.00 以上であり、残り 2 項目についても、3 点台後半である。

「農学」を俯瞰する科目として位置付けている全学科共通の専門科目「農学概論Ⅱ」については、従来は、学科毎に授業内容を計画し、数回の授業を担当していた。しかし、平成 20 年度後期授業評価アンケートにおいて、「学科毎に授業水準が異なる」、「雑学的な講義になる」等の指摘もあり、平成 21 年度の農学部教務委員会において、同科目のシラバスを検討し、全 15 週のテーマ設定、テーマ毎の担当教員の選出等、より体系的な科目になるよう改善を図り、平成 22 年度のシラバスに反映させた。なお、評価結果に対する教員アンケート（平成 21 年度後期分）では、71%の教員が、評価結果に対し「授業やカリキュラムの改善で参考になる記述が多い」、または「参考になる記述も多少見受けられた」と回答している。また、「授業の方法を変更する予定である」、または「数年の結果をみて授業の方法等を検討する」と回答した教員も、ほぼ同数の 70%であり、今後の改善に活かしていく予定である。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育)

法人名 京都大学

学部・研究科等名 農学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 : III「教育方法」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 : 主体的な学習を促す取組

従来から、学生の自学自習の場として、学部学生自習室（1室、定員20名）、学科学生自習室（6室、定員延べ70名）を設置するとともに、講義室、サテライト室（パソコン57台設置）についても、授業使用时以外は、午後8時まで自学自習の場として使用することを認めているが、平成21年度、新たに学生自習室を1室（定員30名）増設した。この自習室については、学生の要望を反映させ、定期試験時直前の1ヶ月間は、開室時間を午後10時までに延長した。

また、学生自習室1室、講義室2室については、平成21年度に無線LANのアクセスポイントを設置し、学生の個人パソコンのネットワーク使用を可能にした。

また、農学部の全学生数の3分の1を占める資源生物学科においては、学生へのきめ細かな修学・生活指導ができるよう、平成21年度に、1～3年次学生について、10人に1人の割合で、クラス担任を置いた。